特集

課税部係長対談

平成30年入庁
国税庁 課税部 課税総括課 企画係長
生田 真実
国税庁総務課、名古屋国税局法人課税課国税実査官、財務省主税局調査課外国調査第二係長などを経て、令和5年から現職。

令和3年入庁
国税庁 課税部 法人課税課 調査企画係長
津田 優希子
国税庁総務課、麻布税務署個人課税部門国税調査官を経て、令和5年から現職。

平成30年入庁
国税庁 課税部 個人課税課 監理第二係長
澤 美帆
国税庁企画課、財務省主税局調査課、デジタル庁参事官付主査などを経て、令和5年から現職。

Q1. 課税部の「係長」ってどんな仕事ですか？

（生田）

課税総括課は、課税部全体の運営方針の決定、調査手続の法定化、租税回避スキーム事案や国内外の大口事案に関する企画・立案といった、課税部の総括を担っています。

私は、企画係長として主に課税部の国会対応や税制改正の取りまとめを行っています。インボイス制度導入後の調査事務運営、暗号資産取引といった新たな経済活動に対する税務上の取扱いなど、課税実務に影響する幅広い範囲に問題意識を向けて俯瞰して考えることが求められるため、課税部内はもちろん、庁内で起きていることに対して日々アンテナを張って情報収集することに努めています。

（澤）

個人課税課では、個人課税事務の企画立案、確定申告関係事務について検討しています。国税庁の課税部の仕事は、それぞれが担当する税目に関する事務の方向性について全国12の国税局（所）に示すことがありますが、全国12の国税局は、北は札幌国税局から南は沖縄国税所までそれぞれに地域ごとによって人口も違えば、管轄する広さも違います。そのため、検討する際には、本当にこの方向性で現場は回るのか、といった観点から事務を検討しています。

また、各局から相談があった際に、臨機応変的に各局の相談相手になることも課税部の係長として重要な仕事であると感じています。

（津田）

法人課税課では、法人課税事務における効果的・効率的な事務運営の企画・立案を行っています。その中で私は、近年の経済活動のグローバル化・デジタル化に伴い増加している国境を越えた取引を行う法人に対して適切な課税を行うための施策の企画・立案などを担当しています。事務運営の大方針は全国的に統一すべき一方で、規模が異なる全国12の国税局の実情に応じてやり方は工夫する必要があるため、施策の実現に向けてどのようなスケジュール、どのような作業を行うべきかなど各局と意見交換をしながら検討しています。

Q2. 仕事をするうえで大切にしていることは何ですか？

（生田）

作業の効率性を意識しつつも、常に相手の立場に立って物事を考えることです。作業依頼の内容や担当している案件の状況を説明する機会が多いため、自分が説明される側だったとしたら何を知りたいと思うか、どんな工夫があったら作業しやすいか、想像力を働かせながら説明するように心がけています。なるべく手戻りのないように慎重に時間をかけて作業を進めることもあれば、国会対応のように迅速に対処しなければならない場合は、スピード感を重視して関係者のところへ足を運んで相談しに行ったりすることもあります。効率的に仕事ができるよう、思考と行動のバランスはいつも意識しています。

（澤）

総合職として採用されると、自分よりも知識・経験が豊富な方とともに仕事をする場面や場合によっては他省庁へ出向し、税以外の多様なバックグラウンドを持つ方とともに仕事をする場面が多くあります。自分の考える案件を進めるにあたっては、自分が他の誰よりも詳しい人となり、主体的に進めていくことが重要になりますが、周囲の協力も必要不可欠です。そのため、自分の考える案件の必要性・意義などを周囲の人にわかりやすく言語化し、如何に周囲に納得してもらった上で案件を進められるか、日々気を付けて仕事をしています。

（津田）

「なんで」を考えるように気を付けています。自分の担当する案件について、納得のいく説明をして了解を得られるよう、この業務はなんのために行うのか、やり方はどうか、など自分の中で「なんで」を繰り返し、わからないことや悩むところは上司や周囲の人と相談しながら、業務について理解し納得して進めるようにしています。

Q3. 入庁時から、係長になって「ここが変わった！」ということがあれば教えてください。

（生田）

大所高所の視点を持てるようになった点です。収集した情報から、今何を求められているのか、何をすべきかを、偏見や私情なく公平な視点で大局的に判断して、必要に応じて上司に相談したり、部下に指示することができるようになったと思います。

（澤）

国税庁は、係長行政とよくいわれますが、係長の元には、上からも下からも、課内からも課外からも多くの情報が集まってきます。係長としては、集まってきた情報を総合的に勘案した上で、施策について主体的に考えることが必要になります。係長になって、自分の考える施策の方向性が庁内の方針と反していないか、世の中の流れに反していないか、大局的な観点から検討することが求められることが多くなったように感じます。

（津田）

入庁した時は、目の前の業務にひたすら取り組む毎日でしたが、係長となってからは、初めて経験する業務に対応するだけでなく、担当業務について係として判断をする立場になり、これまで以上に自分で主体的に考えることが求められるようになりました。係長1年目で苦労も多いですが、勉強になることも多く刺激的で充実した日々を過ごしています。

Q4. 皆さんにとって国税庁の魅力は何だと思いますか？

（生田）

多くの人とのコミュニケーションを通じて、自分自身が成長していけることです。あらゆる政策も、国税なしでは実現しません。その重要性ゆえに、私たちは色々な人たちと議論して、調整していくことが求められます。税務署・国税局という税務行政の最前線から税制度の企画・立案を担う財務省主税局まで、様々なフィールドへの出向経験を経て得た知識、出会った人たちから学んだこと、全てが自分の今の仕事の糧となり、目の前の困難を乗り越えるための胆力となっている実感があります。税という専門性を軸に着実に実力をつけながら、それを仕事に還元することで、また新しいことにチャレンジする自信に繋がっています。

（澤）

国税庁では、国内外問わず、活躍できるフィールドが多くあります。実際、私自身も財務省やデジタル庁などの他省庁に出向して仕事をする機会に恵まれました。出向時に得た税以外の知見や人脈は、国税庁に戻ってからも思わぬところで、業務に生かされることが多くあります。国税組織内でまっすぐ税に向き合えることももちろん国税庁の魅力だとは思いますが、視野や知識を広げるための様々なチャンスが用意されているのも大きな魅力ではないかと考えています。

（津田）

「税」という1つの軸を持ちながら、国内外問わず様々なフィールドで活躍できることだと思います。パンフレットや説明会でよく聞く言葉かもしれませんが、私もこの言葉に惹かれて国税庁にきました。税は幅広く経済・社会・行政と結びついているので、きっと皆さんの興味のある分野が見つかると思います。

Q5. 最後に、学生の皆さんへメッセージをお願いします！

（生田）

国税庁に入庁した決め手の一つは、職員の方々の人としての魅力に憧れたからでした。当時の志は、入庁6年目となった今でも大変な時に自分の心の支えになっています。国が抱える問題というのは尽きないものですが、新たな課題に直面しても、常に勉強して追いつく努力や粘り強さはとても大切です。今皆さんが目標に向かって努力していることも、きっと国家公務員になった先の財産になるものだと思います。国税庁で共に同じ方向を向いて働ける日が来るのを楽しみにしています。

（澤）

国税庁は税制の執行官庁として、適正・公平な課税の実現を使命に、効率的な税務行政の在り方や税務における納税者の利便性の向上などについて検討しています。入庁してから、税務行政の在り方や納税者の利便性向上策は、数学などとは違い、明確な答えがあるものではなく、また正解が必ずしも1つに限られないものだと感じています。そのような課題に挑戦することは容易ではありませんが、皆さんが就職活動をする中で、国税庁の職員とともに挑戦したいと感じてもらえればうれしいです。

（津田）

総合職として採用されると、短いスパンで様々な業務を経験することになります。税はとても専門的で裾野が広いので、知識や経験が浅いなかで次々に様々な分野の業務に取り組むのは苦労しますが、その分自身の視野の広がりや成長を感じることができます。

少しでも興味を持たれましたら、ぜひ一度国税庁の門を叩いてみてください。